

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520177

研究課題名(和文) 風景をモチーフとした彫刻表現法の構築 映像とファンタジーの受容から

研究課題名(英文) Constructing Methods for the Expression of "Landscape as Sculpture" via the Reception of Image as Fantasy

研究代表者

伊東 敏光(ito, toshimitsu)

広島市立大学・芸術学部・教授

研究者番号：40275425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、世界的にも作例の乏しい風景をモチーフとした彫刻を制作するために何が必要であるかという観点から、「風景彫刻」を成立させるための造形理論と実験制作による研究を並行しておこなった。理論研究では、日本国内の庭園、工芸等に見られる風景表現を実地調査し、また古代から現代までの絵画表現の変遷や様々な透視図法や遠近法等の調査を通じて、それらの表現方法の彫刻への応用等に付いての考察を重ねた。実験制作では「広島」や「対馬」といった特定の地域を限定した上での、「風景彫刻」の実験制作をおこなった。本研究の成果として特徴的なことは、実験制作によって彫刻による多様な風景表現の可能性を示すことが出来た点にある。

研究成果の概要(英文)：This study seeks to determine what is necessary to create sculptures based on the motif of landscape, despite the existence of few examples of this art. In order to establish the idea of "Landscape Sculpture," investigation of theoretical aspects was done in parallel with experimental fabrication of actual objects. Examples of the former include field studies on the use of landscape in Japanese gardens and crafts, and research on the evolution of perspective in painting from the distant past to the present. I then sought means to apply the results of this theoretical research to the field of sculpture. I created two bodies of work, based on specific geographies of Hiroshima and Tsushima, in answer to this question. The many possibilities for the formal expression of "Landscape Sculpture," as demonstrated by the physical objects I created, represent the fruit of this research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：風景彫刻 山水表現 彫刻における遠近法 彫刻とフレーム

1. 研究開始当初の背景

芸術表現の対象として、風景は限りなく魅力的なモチーフであるが、古今東西の彫刻作品を観るかぎり、具象表現として優れた作品は人体か動物に偏り、風景を題材とした彫刻はほとんど見当たらない。絵画や工芸の世界に風景を題材とした傑作が多く存在すると比較するとその違いは明らかであり、取り残された研究領域と言える。

風景を題材とした彫刻「風景彫刻」を制作しようとするれば、無限の空間的広がりからある部分を切り取るという作業をしなければならぬ。絵画は前提として画面としてのフレームが不可欠であるため、常に空間をフレームで切り抜く作業をして来た。これに対しフレームを持たない彫刻は、周囲に繋がり続ける風景の一場面を表現する術を持たない。

その他にも、絵画の分野においては、空気遠近法をはじめ、多種類の透視図法等、絵を描くための様々な描法が存在し、その発展と共に新たな風景画が生まれて来た。また工芸の世界でも漆芸、金属工芸(鍛金、彫金他)、織物・染色等々、それぞれの技法の特徴に沿った表現法が開発され、風景が表現されている。勿論彫刻の分野でも風景を表現した作品はあるが、レリーフ等の平面的解釈による作品が大勢を占め、立体として表現されたものはほとんどない。

一方、本研究を進める上での重要な観点として、私達が認識している世界のイメージが近年のインターネットを含む映像伝達技術の進歩により変わりつつあることが挙げられる。風景を認識する場合においても映像情報と実体験の境界が曖昧になり、その結果、風景に対する私達の認識にも変化が生まれて来ている。

2. 研究の目的

本研究では、何故「風景彫刻」が確立されて来なかったのかを考察し、その理由と問題点を明らかにしていく。そして今日までに芸術表現が獲得して来た様々な表現法を利用し、また新しい造形理論を考案することによって、「風景彫刻」の成立を目指す。研究は、理論研究と実験制作という2つ方向から進め、それぞれの研究成果を照らし合わせながら、理論と制作を総合したかたちで風景彫刻のビジョンを導き出す。

理論研究では、遠近法や透視図法など、私達の目の前に広がる世界を描き出すために、絵画が取り組んで来た様々な表現を絵画表現の変遷と共に調査していく。また日本国内の庭園(枯山水庭園等)、工芸等に見られる風景表現の実地調査、さらに私達の風景観に強く影響を与えていると考えられる神話や民話の世界に現された場面(風景)と実景との比較調査等をおこない、彫刻表現への応用について考察すると共に、「風景彫刻」のための新たな造形理論の構築を目指す。

実験制作では、理論研究によって得られた

造形解釈を基に彫刻制作をおこなうが、実制作でしか得られない偶然性や突然変異的な現象も、実制作を伴う本研究の成果に大きな可能性を含んでいるため、出来るだけ多くの作品を制作し、風景彫刻のビジョンを具体的に示す多くの作例を得たい。

3. 研究の方法

これまであまり作例のない風景彫刻の研究に際して、<日本国内の伝統的風景表現に関する実地調査>、<芸北から出雲地方に伝わる神話や民話の調査>、<絵画における風景表現の検証と立体への応用>、という彫刻以外の分野を「風景表現」という一つの見地から調査し、各分野における風景の捉え方と表現方法に付いて分析し検証する。

制作では、例えば「広島」等の場所(対象)を定め、大学院レベルの立体芸術を専攻する学生による彫刻制作をおこなう等、実制作者である本研究代表者を中心に、様々な考察に基づいた実験的な彫刻作品の制作をおこなう。そして、この絵画、庭園、工芸、神話や民話等の分野の調査・考察と、実験制作をパラレルに進めていく。

もう一方で、作家へのインタビューと、大学院生等の若い世代が加わった研究会、さらに本研究グループに作家や美術史・美学の研究者を加えたシンポジウムをおこない、研究を通じて得られる造形理論や実験制作作品の検証や評価をおこなっていく。

4. 研究成果

(1)「風景表現」という見地からおこなった調査のうち、<日本国内の伝統的風景表現に関する実地調査>では、京都及び中国地方の庭園の調査をおこない、枯山水庭園等の絵画性と彫刻性等について多角的に考察した。合わせて盆栽、水石等の調査・研究をおこなった。

庭園の調査地は、智積院、重森三玲庭園美術館、法然院、東福寺、龍吟庵、芬陀院、同聚院、相国寺大光明寺、承天閣美術館、正伝寺、円通寺(京都市)/漢陽寺(周南市)/常栄寺(山口市)/医光寺、萬福寺、雪舟の郷記念館(益田市)/東慶寺(鎌倉市)等、枯山水庭園を中心に多くの日本庭園の実地調査をおこない、庭園の考え方や表現方法を様々な角度から分析した。また、盆栽、水石等の調査では、さいたま市大宮盆栽美術館(大宮市)/湯来の古民家ギャラリー(広島市)等で実見による調査をおこなった。

<芸北から出雲地方に伝わる神話や民話の調査>では、出雲神話ゆかりの地や、出雲大社、荒神谷遺跡(出雲市)/八重山神社(雲南市)にて、地形や風土等の調査をおこない、島根県立古代出雲歴史博物館、荒神谷博物館(出雲市)/島根大学付属図書館、島根大学ミュージアム(松江市)等で、資料と文献による調査をおこなった。

<絵画における風景表現の検証と立体への応用>では、古代から現代までの絵画表現

の変遷をたどり、様々な透視図法及び空気遠近法等の開発と作品との関係性について調査をおこなった。特に中国絵画における三遠法（深遠、高遠、平遠）の調査と考察を通じて、絵画における風景表現の彫刻への応用について研究をおこなった。

(2)実験制作では、研究代表者（伊東）が長辺1m以内の小作品15点と、長辺が1mを超える大型作品4点の計19点。研究協力者である大学院生等5名が制作した作品12点と合わせ合計21点の彫刻作品を制作した。その他にも彫刻作品のためのドローイング等を含めると50点を越える数となる。

(3)その他に、当初の予定になかったものとして、長崎県対馬市での調査・研究が加わった。きっかけは研究代表者が対馬でおこなわれた芸術展に参加したことによるが、そこで、私達日本人の風景の見方や感じ方を方向付ける幾つかの事例と出会ったことによって、対馬での研究を加えることとした。対馬では現代においても自然信仰が色濃く残り、海と陸地（山々）が織りなす風景と、人々の信仰や暮らしが強く結びついている。さらに中国、朝鮮の文化の日本への中継点であった対馬では、古代から近代にいたる古文書が豊富に残り、かつての日本人の自然観を示す文献や絵図等の資料と出会う機会に恵まれている。

対馬ではこれらの文献や資料の調査と、名所や遺跡、神社等実地調査をおこない、自然崇拝と信仰に係る対馬の風景との関係を実風景のデッサンや写真撮影によって考察し、対馬をモチーフとした実験制作をおこなった。本研究に対馬での調査と実験制作を加えたことにより、場所の調査と制作がより結びつく効果があった。

(4)本研究の特徴は理論研究と実験制作を平行に進めることによって生じる研究成果にあると考える。ここからは実験制作で制作した作品と理論研究での考察結果を照らし合わせながら研究成果を報告することとする。



図1 「宮島鼠」(制作者:伊東)

図1は、古材を使った木彫で、幅295cm奥行き135cm高さ110cmの大型作品である。対象としたのは安芸の宮島であるが、全体のフ

ォルムから宮島鼠という作品名を付けた。実際の宮島は長辺が約10kmあるので、3000分の1以下に縮小した大きさの彫刻である。この作品のように、風景をモチーフとした彫刻では、等身大を基調とする人物像とは違い、実物大で表現できないという現実があり、研究当初の背景で記したフレームの問題と共に制作に際しての難題であった。

本作の制作動機となったのは、筆者(伊東)が宮島の対岸を車で走行中に、少し振り向いた角度から見た宮島が鼠の形に見えたことから、観光等で20回以上も訪れている宮島を研究対象とすることとした。

まず全体のフォルムに関しては、車窓から見た時の印象を大切に、地図やインターネットで正確な宮島の形状を調べることは避けることとした。部分に関しては、宮島の名所である厳島神社や弥山等、印象に残っている場所やその場面を、記憶をたどりながらつくり込んだ。

ここでの大きな発見は、記憶の中での場面は鮮明であるが、その場面の位置関係はかなり曖昧であるということである。例えば弥山を登った時の記憶は、途中のお堂や曲がりくねった登山道、頂上付近の大岩等は形も色も記憶しているが、互いの位置や出会った順番ははっきりしない。そこで、実験制作では、大まかな位置関係を確認するだけに止め、後は記憶に従って場面を配置することとした。また長辺10kmもある島では当然行ったことの無い場所が多く、特に島の裏側等は、人からの話して聞いたことがあるだけで、自分の体験としてはまったく未知の場所であった。

人物像ではこのような位置関係の大きな狂いや、未知の箇所があることは、同じ人物を知る人にとっては大きな形の狂いと感ずるに違いない。例えばいくら目が特徴的な女性でも、目鼻の位置関係が狂うと別人に見えてしまうが、登山途中で見た大きな岩は登山道のどこにあってもそれほど違和感はない。

ここでの結論として、風景彫刻と人や動物の彫刻とでは、全体と部分の関係において大きな違いがあることが分かった。

次は作品のスケールと遠近法についての考察である。直径10kmの宮島を3mで現す場合、一番の問題は、例えば遙か彼方に見える弥山をどう表現するかという距離と空間表現にある。

絵画では透視図法や空気遠近法が確立されているため、近景と遠景を描き分けることが出来るが、彫刻には遠近法が存在しない。また、絵画の遠近法のように近い所は大きくはっきりと、遠い所を小さくぼやけて表現したとしても、作品に対する鑑賞者の位置を限定出来ない彫刻においては、遠い設定の方から鑑賞者が見ることは避けられず、正面からのパースは、背面から見ると逆パースとなってしまう。

本作では、フレームの問題への取り組みと

しては、海によって他の陸地から切り離されている島を扱うことでひとまず解決した。パースの問題については、遠い場所を近い場所より比例的に小さくする透視図法的な処理をある程度活用し、彩度の変化等による空気遠近法的な表現も作品に積極的に取り入れた。

以上、図1の実験制作(2011年度制作)においては、上記の発見や問題を様々な方向から検討しながら、彫刻作品としての成立の可能性を示すことが出来た。

本研究では、当初のからの課題として「風景の場面をいかに切り取るか」と言う問題を抱えていた。研究の背景で述べたように絵画や写真にはフレームがあるため、作者は表現したい場面をフレームで切り取ることによって、対照とする場面とそうでない場面を区別することが出来る。

この課題に対する一つの対策として、図1.では島を対照とすることでひとまずの解決を得たが、2012年度の研究ではこのフレームの問題に積極的に取り組んだ。



図2 「南原峡」(制作者:伊東)

図2は、広島市北部にある南原峡の滝をモチーフとしたレリーフ作品で、53.5×38×4cmの小品である。

この作品では、図1.の宮島とは違い、渓谷にある滝とその周辺をモチーフにしたもので、当然この作品に現された場面の外側には変化に富んだ渓谷の風景が広がっている。

場面の切り取りの問題は、研究当初から大きな課題であったが、2012年度の研究によって一つの解決策を導きだすことが出来た。

方法としては、まず作品としたい場面を絵に描くか、写真を撮るかする。その際の構図は、絵や写真の時よりもフレーム中に対象となる場面を小さめに入れて周囲が入る様にする。次に、この絵または写真にモザイクを掛ける。モザイクを掛けることで陰影や形状が単純化されるので、ここで対象とする場面と周囲を区別して切り離す。その後モザイク

を外して元の画像に戻す。

この方法で対象とする場面とそれ以外を区別することで、図2のような場面設定が出来るのである。さらにこの方法はモザイクだけでなく、画面を抽象化することによっても可能である。対象を出来るだけ抽象化し、形や色を単純化することで、モチーフとする場面を抜き出すという方法である。

研究代表者(伊東)は、これらの方法で様々な場面を抜き出しているうち、モザイク等を使用しなくても抜き出しが出来るようになって来ている。そもそも、理論と実制作にはこのような関係があり、筆者の体験は本研究の一つの成果であると考えている。



図3 「AA60」(制作者:伊東)

図3「AA60」は、405×415×1670cmの大型彫刻である。2013年に制作したこの彫刻では、約2週間の旅の記憶と感動を一つの彫刻として成立させようと試みた。その旅は、アメリカ テキサス州の TCU 芸術学部と広島市立大学芸術学部の交流展に際して、筆者が大学院生と共に、2週間の滞在制作をした時のものである。

旅の記憶として最も強く残っていたのは、作品制作のための石材を手に入れるため、TCUのあるフォートワースから西に300kmのオーバニーという街の石切り場までドライブした時に見た風景であった。それは乾燥した平原にメサとよばれるテーブルマウンテンが点在するテキサス独特の風景であり、そしてもう一つは旅の帰り際に見た浸食されたアリゾナの台地とサボテンの記憶である。

これらの風景を彫刻作品しようとするれば、やはり最初の課題は彫刻全体のフォルムということになる。そこで本作では実験的な試みとして、彫刻のフォルムをこの旅で利用した成田 フォートワース間の直行便「AA60」の飛行している姿とした。



図4 「AA60」部分

飛行機の羽の部分はフォートワースからオーバニーに向かう途中の平原であり、右翼には石でメサを表現した。また飛行機の胴体部分には、アリゾナの風景と石のサボテンを表現した。

本作では、テキサスへの旅という出来事の記憶と感動を優先させ、全体（飛行機）と部分（風景）との現実サイズの相互関係は問わないこととした。实景を前提としての「風景彫刻」において、ここまで規制無しに表現展開して良いものかという疑問は、制作者である筆者にも残るが、「風景彫刻」の可能性を示すものとして、実験制作における大きな前進であったと考える。



図5 「Taming Plastics / 対馬の景色」
(制作者：丸橋光生)

図5は、本研究の若手協力者の一人が、100円ショップで購入したプラスチックの日曜雑貨類を素材に、対馬の浅茅湾をモチーフとして制作したもので、対馬市の半井桃水館に展示した作品である。この作品では「日本国内の伝統的風景表現に関する実地調査」で得られた枯山水庭園等の研究を基に、作品と鑑賞者の視点に関する実験が試みられている。

禅宗寺院の石庭の場合、方丈（建築）の中から見るのが想定されているため、鑑賞者の視点は限定されている。本作は、寺院の庭における鑑賞者の視点の考察を基に、制作をおこなったものであり、展示期間には鑑賞者の視点と、空間内での作品配置（インスタレーション）の効果に注視して、鑑賞者の動きをビデオに記録する等の調査をおこなった。

(5)本研究では、世界的にも作例の乏しい風景をモチーフとした彫刻を制作するために何が必要であるかという観点から、「風景彫刻」を成立させるための理論（造形理論）と実制作（実験制作）による研究を並行しておこない、研究会、シンポジウムを通して、様々な角度から風景表現に関する分析・評価等をおこなった。

本研究の成果として特徴的なことは、実験制作によって多くの彫刻作品が誕生した点にある。作品数は大小含め3年間で20点以上となり、彫刻による多様な風景表現の可能性を示す作品群が誕生した。また制作の裏付けとなる造形理論においても、絵画の構図や遠近法を基にした立体における遠近法等（仮

説）を発案した。これらの仮説と実制作とを照らし合わせることによって、実験段階ではあるが、「風景彫刻」を制作するための幾つかの方法論を導き出すことが出来た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1件)

著者名：伊東敏光

出版：公益財団法人 泉美術館

発行年：2014年

書名：ある風景のはなし

（泉美術館展覧会カタログ）

総ページ数：5ページ

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊東 敏光 (Ito Toshimitsu)

広島市立大学 芸術学部 教授

研究者番号：40275425

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

・ 研究協力者

藤井 匡 (Fujii Tadasu)

東京造形大学 准教授

研究者番号：10714066

靄田 茜 (Turuta Akane)

公益財団法人 泉美術館 学芸員